薩摩琵琶歌
臺灣入

自序

凡そ薩摩琵琶歌を奏せんとするには　まづその歌曲の性質、精神のある所を究め　然して其の歌詞に従ひて　悲哀なる個所は悲哀　壮快なる個所は壮快に曲節に抑揚を附し　聴者をして恰もその境にあるが如く感ぜしめざるべからず　これ琵琶奏曲第一の要義なり　故に吟ぜんとせばまづ精神の沈静を計り　熱心に毫も浮華なる所なかるべし　本書は一字一句新楽の符号を以て楽譜を附し　聊か心ある士の為めに編製せしものにして　如上の精神を以て曲節に対し所謂節を生かして奏すべし　節を歌ふ人はあまたあれど精神を歌ふ人は尠し　これ節にのみ拘泥し　精神を没却したればなり　大方諸子幸に一本を座右に備へてこの注意を忘るゝなく　業務の餘暇一曲を奏して浩然乃氣を養ひ給へ

謡節注意

音の大小高低等は　それぞれ大小長短の符号を以て示せり　大干とあるは最高音を称するものにして　仮に謡者の大干を十と定むれば其の八の音声を以て歌ふを可とす　如何となれば謡者が自身の最高音を悉く発せば　第二に発すべき音声に困難を来すのみならず　第一に聲に餘裕なく　聴者に於ても聞苦しきものなり　中干とは　初め地音に出て中頃六七の干音に上げ　亦地に落すものなり　地音とは三若くば四五位の音にして　歌の曲譜により異る者とす　崩れとあるは勇壮活発の音を以てすべし　吟替りは概して悲哀なる場合なれば　その心地を以て涙声等を用ふるを可とす　段落即ち謡切りは　符号の示す通りに聲を引き廻し　終りを地に落す

明治四十一年文月下浣

編者識

臺灣入り

皇の御威は四方に輝きて、清國遂に和議を請ひ、臺灣割讓

献上合戰に治まれる、君が代、段落　御代コソ目出度けれ、

「大干」「臺灣島の土賊ども、龍車に向ふ蟷螂の、斧を揮ふ

と聞えしかば、征討の師をぞ遣はさる。近衛兵の精鋭引率

ひて、御渡海、めされしは、陸軍中将大勲位、北白河宮

明治41.8 内交

とて金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸、幕営あり
其跡に、木を削りてぞ記さるゝ、炎熱焼くが如き日に、三貂だ
いれいの険阻をば、馬にも乗らず越へ給ひ、大雨頻に降る時
もぬれにぞぬれて進まるゝ、士卒之に感激し、病兵にて
崩 さしても立上り、命をおしまず進軍す、諸所の塁にこもり
たる賊兵どもの射出す弾丸は、雨か霰か白雪の、降り注ぐが

如くにて砲烟暗く天を蔽ひ百雷齊しく落つるに似たり、宮は矢
石を冒しつゝ、突貫せよと下知あれば、川村少将、児島大佐を
初めとし、勇み立たる近衛兵我れ先きにと奮進し賊の
本営に寄て見る、賊兵之に気を呑まれ、右往左往に逃げ
散りて、閃 さしも降参するもの数知れず、扡 大砲小銃の戦利品、山
を築かん許にて、勝閧どつと、揚げられば、宮は此時、優く

として、基隆城へ入らせ給ふ、斯くて六月十日には臺北城を陷れ、七月新竹を占領し、翌くる八月には、彰化臺灣府を定め、十月初めつかた、殿下臺南さしてぞ進ずる天あつく、瘴癘多く、地險しくして糧道絶へ、千辛萬苦の具中に、宮は士卒と食を分ち、晝は汗ばむに鞍を去らず、夜は荒野に露營して衣襟の袖に身を宿ど、唯国力

給ふ、君の恩光、洋宇に輝く、「時鶯」鳴呼痛ぶ

せ給ふ、日々に重らせ給ふに依り、御供の人々逐に御病に係らせ給ふ、御供の人々

お帰りまし、都へ帰らせ給ふ、頻りに御諫め申せど迎宮は

いつの日か、吾が軍の將として、賊徒平定

を見ぬ内は、たとへ臺灣の土となるとも、吾のみ、士卒

をおはせ、いづくんか都に帰らんと、籠に呂れて進まる
し
る、御輦路の濃際に賊徒平定と宮にたつことを
手を合して萬歳と、唯一聲、拝び玉ひ、斗らにて、敵なく
天にきらせ玉ふ、行くゆく日々、武の古事、今朝の吾に参
らせて、國中の民も喜べ、働軍せぬなかりけり、去り
ながら、修る日々に思はねど、老の不安に戦なり、只人は

名こそをしけれ、皆人は、名誉千歳に残せかし、

臺北悠々に政成、　皇軍到處湧歓聲

旭光將被臺南地、　殲彼渠魁安萬生

と、宮の歌ひ玉ひ、如く、盛功偉烈後の世に、「幾」輝き渡りて
重りなく北白河の、水に行きて帰らねど、月影すみ渡る光
は世に流るらん光は、「殷」「路」世に流るらん」

257
530

明治四十一年七月廿二日印刷
明治四十一年八月一日發行

出版目録

國の御柱　城山（附逢来山）
錦の御旗　廣瀬中佐
威海衛　小督
臺灣入　川中嶋
吹雪の敵　壹野落二段
仁丸　石童丸

不許複製

曲譜　西田金起
發行者　東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地　西村寅次郎
發行者　東京市日本橋區馬喰町四丁目廿壹番地　鈴木武二郎
印刷者　東京市神田區駿河臺袋町十一番地　須佐權平
印刷所　東京市神田區駿河臺袋町十一番地　東陽堂
發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地　東雲堂
發行所　東京市日本橋區馬喰町四丁目廿壹番地　文友堂

正價壹部金七錢